黙示録12章 「イスラエルを巡る天の戦い」

1A 男の子を食べようとする竜 1－6

1B 女の産みの苦しみ 1－2

2B 国々による竜の虐げ 3－4

3B 出産後の女の避難 5－6

2A ミカエルの軍勢に負ける竜 7－12

1B 天から投げ落とされる竜 7－9

2B 告発を受けてきた兄弟たち 10－12

3A 女を押し流そうとする竜 13－18

1B 逃れの場所 13－14

2B 川を飲み干す地 15－16

3B 女の子孫への戦い 17－18

本文

黙示録 12 章を開いてください。私たちは、前回、第七の御使いがラッパを吹き鳴らしたところを見ました。けれども、それにともなう最後の災いは、15 章と 16 章に入らないと出てきません。七つの鉢が地上にぶちまけられる災いです。11 章、12 章、そして 13 章は、いわば「諸国の民の怒り」を預言しています（11:18）。主キリストがこの世をすべて支配される、その力が現れようとしている中で、悪魔が怒り、最後のあがきをすること。そして反キリストが現れ、その怒りをあらわにすること。それにともない、諸国の民が怒るところを見ていきます。神が到来し、神の国が近づけばそれだけ、今までの自分たちが罪を楽しみ、喜んでいた領域が狭められ、なくなってしまうことを恐れるからです。パウロがエペソで福音を宣べ伝えた時に、アルテミス神殿の銀細工人たちが、騒ぎ出しましたね。自分たちの商売が上がったりだからです。

それと同じことが、霊において、天において展開されているのが、12 章の示すところです。悪魔とその勢力が、自分たちのいる領域がなくなって、天に落とされるところを見ます。

1A 男の子を食べようとする竜 1－6

1B 女の産みの苦しみ 1－2

1 また、大きなしるしが天に現れた。一人の女が太陽をまとい、月を足の下にし、頭に十二の星の冠をかぶっていた。

大きなしるしが天に現れました。この女の姿、太陽をまとい、月を足の下にして、頭に十二の星の冠をかぶっていますが、まぎれもなくイスラエルの姿です。創世記 37 章、ヤコブの子ヨセフが夢

を見て、それを家族に話している場面です。「9 節 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。』と言った。」太陽はヤコブのこと、月は母ラケルのこと、そして 11 の星は、ヨセフ以外のヤコブの息子たちを表していました。

イスラエルが女として現れ、それをこれから現れる竜が滅ぼそうとしているというのが、この章の幻が示していることです。それは、イスラエルは、神に愛された者たちであり、神がイスラエルに結ばれた契約は、夫が妻と誓約を結ぶことに喩えられています。それで女として喩えられています。そして、女が生む男の子を竜が滅ぼそうとします。それは、神が蛇に対して宣言された、「女の子孫が、お前の子孫の頭を打つ」ということばが、アブラハムの子孫に受け継がれていくからです。敵の門を開く子孫が、彼の子孫から出てきます。そして、ダビデには、自分の世継ぎの子がその救い主、キリストであることが伝えられます。

[2] 女は身ごもっていて、子を産む痛みと苦しみのために、叫び声をあげていた。

イエスがマリアから生まれる時の、イスラエルの状況はローマに虐げられていました。ダニエル書を読みますと、ユダヤ人のバビロン捕囚後の、世界史が預言されています。バビロンからペルシア、ペルシアからギリシア、そしてローマへと続きます。それぞれの時代にてユダヤ人は苦しみを受けてきましたが、ローマ時代は、鉄の支配であり、反逆者には容赦ない制裁が加えていました。当時のことを「パクス・ロマーナ」と呼びますが、パクスは平和のことです。けれども、それは武力をもって抑えつけたところの平和です。

ユダヤ人たちは、これら異邦人の虐げから解放してくださる、メシアを待ち望んでいました。それでバプテスマのヨハネが現れ、次に主が現れました。バプテスマのヨハネがもしかしたらキリストではないか？と思って、広域からバプテスマを受けていました。主ご自身の宣教にも全国から人々が主のところにやって来ました。その時にイスラエルが建て直されると、熱く信じていたのです。

2B 国々による竜の虐げ 3－4

[3] また、別のしるしが天に現れた。見よ、炎のように赤い大きな竜。それは、七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた。

これが悪魔であることは、9 節を読むとわかります。竜でもあり、古い蛇でもあるとありますが、竜と蛇が同じ生き物として語られている箇所があります。ヨブ記 41 章に「レビヤタン」という動物が出てきます。その描写を読むと、竜のような生き物です。そして、イザヤ 27 章 1 節には、「その日、【主】は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタンを、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」とあります。竜のような生き物であるレビヤタンが、ここでは蛇として語られてい

ます。そして、これは文脈で、悪魔であることが分かります。思えば、創世記 3 章でエバが、蛇に惑わされましたが、神は蛇への呪いとして、地を這うようにされました。となると、その前は地を這っていなかったということになり、竜のようであった可能性があります。

そして、竜が「炎のように赤い」とありますね。これは、災いの火の色でもあるし、人々が流される血の色であるかもしれません。これから、世界に荒廃をもたらす獣が出て来て、全世界の軍隊が、再臨のイエスによって殺されて、血の海になります。

そして大事なのは、竜が「七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた」とあることです。これが、次の章 13 章においてこれが獣の姿であり、それから 17 章においてその秘儀の意味するところが解き明かされます。ダニエル書 7 章における、復興ローマでもある第四の獣に似ています。ここでは、世の諸国の姿であり、諸国を最終的に自分の勢力下におく、反キリストの姿であります。何をもって、七つの頭なのか？そして、十本の角なのか？については、17 章で、秘儀が解き明かされていますので、その時を待ちたいと思います。はっきりしているのは、これが世の諸国の姿であり、その諸国の動きの中に、神に敵対する竜の支配があるということです。

これが、国々のいろいろな動きの背後にある、天における姿です。キリストに対して、またキリストを生んだイスラエルに対する動きであることに気づく必要があります。なぜ、ファラオがヘブル人の男の子をナイル川に投げ込むというような暴挙に出るのか？なぜ、ハマンがモルデカイへの憎しみだけでなく、ユダヤ民族の撲滅を考えるという飛躍、極端に走ったのか？そして、キリストご自身に、なぜヘロデとピラトが敵対していたところ、仲良くなったのか？その鍵が、悪魔に感化されていたから、ということができます。

[4a] その尾は天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。

「天の星」ですが、聖書では「星」はしばしば、天使のたとえとして使われています。例えば、この黙示録でも、イエス様の右の手の中にあった七つの星は、七人の御使いであるとありました（1:20）。そして、悪魔は、天使の三分の一を自分のところに引き寄せ、そしてそれらを地上に投げました。それら堕落した天使が、聖書で「悪霊」と呼ばれているものではないかと考えられます。

そこでイエスが地上におられた時、福音書を見れば、数多くのところで悪霊が対峙してくることに気づきます。悪霊どもは、それまでも地上に徘徊している者たちがいましたが、主が来られる時はとみに、ひどかったのではないかと思われます。メシアの使命として、イザヤは、「61:1-2 捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、2【主】の恵みの年」と告げていました。捕われ人、囚人というのは、物理的な牢獄というよりも、霊的に囚われていたと解釈できます。

[4b] また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

この出来事は、マタイ 2 章 16 節に出てくるヘロデ王の幼児虐殺のことです。こう書かれています。「ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かると激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。」この出来事の背後に、竜、悪魔のしわざがあったのです。当時の政治指導者ヘロデの背後に、こういった悪魔のしわざがあったのです。

3B　出産後の女の避難　５－６

[5] 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもってすべての国々の民を牧することになっていた。その子は神のみもとに、その御座に引き上げられた。

メシアが、鉄の杖をもって牧するということは、預言の中で語られていました。詩篇二篇には次の預言があります。「詩 2:7-9 私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。』」そして黙示録に言及があります。2 章、ティアティラの教会に対して、勝利者に対してイエス様は約束されました（2:26-27）。そして、 19 章に、白い馬に乗って、諸国の軍隊と戦われるイエスが預言されていますが、そこにも、鉄の杖で牧することが書かれています。鉄は、力を示しています。強大な軍隊があって反抗しようとしても、主はことごとくそれを打ち砕かれます。それが、神の国において、正義と平和が確立される理由です。

そして今は主は、よみがえられた後に天に引き上げられ、神の右の座に着いておられます。そして、そこから立ち上がり、悪魔をご自分の足で踏みつけることになるのです。今は、主は、悪魔の攻撃を受けている私たちのために執り成してくださっていますが、いつか踏みつけてくださるのです。「ロマ 16:20 平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」

[6] 女は荒野に逃れた。そこには、千二百六十日の間、人々が彼女を養うようにと、神によって備えられた場所があった。

男の子を生み、この子が天に上げられた後に、女に何が起こるかを教えています。それが、ここにあるように逃げて、1260 日の間、養われるように神に備えられたところに行くというのです。キリスト教会の歴史で、イスラエルは、キリストが与えられた後は、神の選びのご計画とは関係のないようにされています。いいえ、ここを見る限り、そうではないのです。

それどころか、イエスが、オリーブ山で弟子たちに語られたことなのです。「マタイ 24:15-21 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら――読者はよく理解せよ――16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。」

主がここで言われているように、ダニエルの預言に基づいて、主はユダヤに住む人々に逃げるように言われています。その預言とは、9 章 27 節のことです。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」11 章においては、この男は、すべてのものより自分を高くするとあります。自らを神として、それから聖所に入ります。このことについては、次の黙示録 13 章にも出てきます。

2A ミカエルの軍勢に負ける竜 7－12

このように、竜が女を滅ぼそうとするのですが、イスラエルのための御使いが聖書では紹介されています。イスラエルのために戦う御使いで、高い位についている天使長です。ミカエルです。

1B 天から投げ落とされる竜 7－9

7a さて、天に戦いが起こって、ミカエルとその御使いたちは竜と戦った。

ダニエルの預言には、終わりの日に大いなる戦いがあるとして、11 章と 12 章に長い預言があります。その前に、御使いたちの間の攻防が 10 章に繰り広げられています。ダニエルが断食して祈っている時に、イエスご自身の栄光の輝きをもって一人の御使いが現れました。彼がダニエルに言います。「10:20-21 私がなぜあなたのところに来たか、知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために帰って行く。私が去ると、見よ、ギリシアの君がやって来る。21 しかし、真理の書に記されていることを、あなたに知らせよう。私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。」

このように、ペルシアの国の背後で働いている堕落した天使がおり、さらに、ギリシアの君がやって来ると言われます。ギリシアの国が台頭し、その国を左右する堕落した天使がおり、悪魔の思いを果たそうとするのです。事実、イスラエルは、激しい迫害を受けます。ギリシアの王による大迫害があることが預言されており、それがアンティオコス・エピファネスによって成就しました。そして、終わりの日には反キリストによって滅ぼされそうになる危機に陥ります。11 章に書いてあります。

そのような絶体絶命のような中で、天において、ミカエルがイスラエルのために戦うのです。今、「11:21 私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。」とあります。続けて「12:1 その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。」とあります。このように、イスラエルの民が苦難から救われるために、民を滅ぼそうとする悪魔とその使いと戦う、ということです。

7b 竜とその使いたちも戦ったが、8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。

竜と、竜に従う使いたちは、もともと御使いとして天において領域が与えられていました。けれども、神に反逆してきた御使いたちは、そこから外れていきました。その中の多くが、暗闇の中に閉じ込められています（ユダ 6 節）。ヨブ記では、地を徘徊していたサタンの姿を見ます。神の前にも来ているので、天の領域から離れていますが、その中間のところにいるようです。それを新約聖書では、「空中」と書いてあります。罪の生活をしていた私たちについて、パウロはこういいます。「エペソ 2:2 かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

今、この天における中間の領域、空中と呼ばれるところで、ミカエルの軍勢と、竜の軍勢が戦って、それでミカエルの軍勢が優勢となり、サタンの軍勢がそこにいられなくなりました。

9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。

この大きな竜、あのエバを惑わした蛇も、そして悪魔、サタンも同じものです。悪魔というのは、中傷者というのが元々の意味です。サタンは敵対者という意味です。そして、全世界を惑わす者とも言っています。すべての者が、悪魔の支配の下で惑わしを受けています。

しかし、今、「地に投げ落とされた。」とあります。この落ちたのは、13 章を見ますと、最後の第七十週の半ばです。その後半に竜が、獣に自分の権威と力と位を与えます。こうして、大患難の後半は、竜が地上にいて直接、獣によって関わっていく最悪の時を迎えます。

2B 告発を受けてきた兄弟たち 10－12

10a 私は、大きな声が天でこう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と王国と、神のキリストの権威が現れた。

この声は、前回の学び 11 章 15 節にも出てきました。「第七の御使いがラッパを吹いた。すると

大きな声が天に起こって、こう言った。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」」このときの声は、この世の王国がキリストの力と権威に服することが書かれていますが、ここではその背後にいた悪魔の勢力が、天から落とされて、天においてキリストの権威が現れたことを喜んでいるのです。

まず、「神の救い」が現れたと呼んでいます。神の救いとは、人々が、悪魔の支配から御子の支配の中に移されることを言います。「コロサイ 1:13 御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」パウロが、イエス様から言われた言葉をヘロデにこう伝えました。「使徒 26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」闇の勢力に、キリストの力と王国が現れた時に、神の救いが訪れるのです。

10b 私たちの兄弟たちの告発者、昼も夜も私たちの神の御前で訴える者が、投げ落とされたからである。

午前礼拝で詳しくお話ししたので、そちらを参照してください。天において、信仰のゆえ殉教した兄弟たちを、サタンが告発していました。私たちには、欠けに見えることがわんさかあります。それを最大限利用して、なんとかして神への信頼から私たちを引き離そうとしているのです。そこで思い出さなければいけないのは、私たちは神に愛されていることです。無条件で愛されていることです。恵みによって選ばれていることです。行いではなく、主権者である神が一方的に選ばれました。その告発者が、今、天からいなくなっています。

11 兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに 竜に打ち勝った。彼らは死に至るまでも 自分のいのちを惜しまなかった。

ここの兄弟たちは、患難期に殉教した人たちですが、今のキリスト者にも同じことが言えます。私たちが悪魔に打ち勝つ、世に打ち勝つのは何でしょうか？一つは、「子羊の血」です。子羊の血が、私たちの罪を完全に洗い清め、罪を私たちから拭い去ることができます。

それから、「自分たちの証しのことば」です。これは、神から与えられた良心に従い、脅されても、キリストを主として心であがめることから始まります。「Ｉペテ 3:14-15 たとえ義のために苦しむことがあっても、あなたがたは幸いです。人々の脅かしを恐れたり、おびえたりしてはいけません。15 むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。」そして、その証しを立てることで、霊的な力と権威が現れます。隠したところには、現れません。キリストの告白はこう

も大切なのです。「マタ 10:32-33 ですから、だれでも人々の前でわたしを認めるなら、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。」

そして彼らは、「彼らは死に至るまでも 自分のいのちを惜しまなかった。」とありますが、サルディスの教会に対してイエス様が、「死に至るまで忠実でありなさい」と命じられました。7 章にも、患難期の聖徒たちが、患難の中で殉教して、それで天におられる神の前に立っている姿があります。そして私たちは、日々、自分のいのちを捨てる生活を歩んでいます。自分を死んでいるとみなすことによって、キリストが生きてくださり、証しを立てることができます。

12 それゆえ、天とそこに住む者たちよ、喜べ。 しかし、地と海はわざわいだ。 悪魔が自分の時が短いことを知って激しく憤り、 おまえたちのところへ下ったからだ。」

天に住む人々と、地と海に生きるものとの対比です。天では、兄弟たちへの告発がなくなるので、喜んでいます。けれども、地では災いが極みに達します。13 章で、獣の国ができます。

しかし、悪魔が激しく怒っているのは、「自分の時が短いことを知って」激しく憤っているからだと言っています。「最後のあがき」です。彼はキリストが来られて、自分が底知れぬ所で鎖につながれる時が近づいていることを知っているのです。それで暴れるのです。ここは大事ですね、私たちは悪魔が激しく攻撃してきても、それは、相手が焦っているからです。そう見ていくことは大事だし、事実そうなのです。

3A 女を押し流そうとする竜 13－18

1B 逃れの場所 13－14

13 竜は、自分が地へ投げ落とされたのを知ると、男の子を産んだ女を追いかけた。

ここの追いかけるということが、オリーブ山でイエスが弟子たちに語られた、ユダヤにいる人々は逃げなさいと言われたところです。

14 しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒野にある自分の場所に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われるためであった。

イスラエルの民がエジプトから救い出されて、荒野の旅をして、シナイ山の麓にまで神が無事に導かれた時に、主が言われました。「出 19:4 あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。」鷲の翼は、イスラエルがエジプトから逃れて、荒野で安全に守られ、養われる時に使われていた言葉です。同じようにして、

今、イスラエルの残りの民が、荒野に逃げていく時に、主が彼らを守ってくださるということです。そして、無事に、彼らのために備えておられる場所に連れて行かれる、ということです。

ここの「荒野」はどこを指すのか？オリーブの山での話では、「ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」と、主は命じました（マタ 24:16）。けれども、ユダヤ地方はすでに山地です。山地にいる人々に、山に逃げなさいと言われているので、どこなのでしょうか？そこから見える山々は、死海のあるアラバを越えたところ、モアブやエドムです。死海の南から紅海までに広がっている山地です。

ところで、預言には「ボツラ」という地名が出てきます。かつてのエドムの都でした。ミカ書 2 章 12 節にこうあります。「ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起こる。」ここの「囲いの中」は「ボツラ」と書いてあります。そこは今、ヨルダン南部にあり、世界遺産にもなっている「ペトラ」ではないかと言われています。新約時代は、ナバタイ王国の都でありました。そこは山々に取り囲まれている盆地のように、岩山に取り囲まれた渓谷の一部となっており、一つの大きな避難所のようになっています。

そこに、「一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われる」とあります。覚えていますか、6 節では、「千二百六十日の間」とありました。一年が 360 日という数え方なので、ちょうど三年半です。その時に、かつてないほど、これからのないほどの大患難が、ユダヤ人を襲いますが、それでもここで残された者たちが養われる、ということです。

「養われる」とありますが、イザヤ 33 章 16 節には、当時の人々が高い岩地というものをどのように受け止めていたかを描いています。「このような人は高い所に住み、その砦は岩場の上の要害である。彼のパンは備えられ、彼の水は確保される。」強固な砦であります。かつて、マサダの要塞がありましたが、死海のほとりにある菱形になっている台地です。そこは砦でもあり、ヘロデ大王の宮殿でありました。エルサレムをローマが包囲して破壊しましたが、その残党がここマサダに立てこもったのです。上にはわずかな降水をも貯める高度な貯水設備もあり、中では菜園もあり

ました。ですから、三年間、包囲されていたのにもかかわらず、飢え死にすることもなく、陥落して、彼らが自決した後にも食糧が残っていたと言われています。

それと同じように、主がボツラの高い岩地の砦という地形で彼らをかくまい、養われるのではないかと考えられます。モアブに対するイザヤの預言が 15-16 章にありますが、そこでモアブを通って逃れている者たちに、「宿らせなさい」と命じている神のことばがあります。「あなたの中にモアブの散らされた者を宿らせ、荒らす者から逃れる者の隠れ家となれ。（16:4）」モアブに対する預言なのですが、よく読むと、16 章 1 節には、「セラから荒野を経て」とあり、具体的にはモアブにいた人々がセラ、つまりエドムに逃れてその人たちが、メシアに救われている様子が描かれています。セラにあるボツラが、隠れ家となれと教えているのです。

ダニエルがこの期間について、預言を受けていました。そこでの目的を、主の使いがはっきりと語っていました。「12:7 それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」聖なる民の力が砕かれるとあります。この大きな試練の中で、彼らが自分たちの持っている力が砕かれます。今まで、迫害を受けて自分たちの手で救い出そうとするその力が砕かれるのです。ちょうどヤコブが、自分の手で神の祝福を得ようとする人生を歩みましたが、ついに、御使いと格闘して、太ももの関節を外されて、泣いて祝福を願い、祝福されたようにです。その力を打ち砕かれて、天から来られるメシアを求めるようになるのです。

逃れる者たちの中で、主にそれでも背いている人は、ユダヤ人であっても取り除かれます。反キリスト率いる軍隊によって滅ぼされます。ちょうど、エジプトを脱出した後、荒野でイスラエルが守られていたのに、その道中、神に反抗して死んでいった人々が多く出たようにです。エゼキエルが預言しました。「エゼ 20:35-38 わたしはあなたがたを国々の民の荒野に連れて行き、そこで顔と顔を合わせて、あなたがたをさばく。36 わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの地の荒野でさばいたように、あなたがたをさばく――【神】である主のことば――。37 わたしはまた、あなたがたにむちの下を通らせ、あなたがたを契約のくびきの下に連れて行き、38 あなたがたの中から、わたしに背く反逆者をより分ける。わたしは彼らをその寄留している地から導き出すが、彼らはイスラエルの地に入ることはできない。そのときあなたがたは、わたしが【主】であることを知る。」このように、神により頼み、メシアの現れを待っている者たちだけが生き残り、救われるのです。

<u>2B 川を飲み干す地 １５－１６</u>

15 すると蛇はその口から、女のうしろへ水を川のように吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。

この水、大水は、ダニエル書 9 章 26 節などを見ると、軍隊が押し寄せる姿を形容する時に使います。黙示録 16 章を見ますと、世界からの軍隊がハルマゲドンに集まることが預言されています。「16:16 こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。」そ

して、ハルマゲドンに集められた諸軍隊は、エルサレムを攻め入り、その半分を奪っていきます。「ゼカ 14:2 わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」そして、自分たちの軍隊を、今度は、ボツラにいる残りの民に矛先を向けるのです。エレミヤが預言しました、「49:14 私は主からの知らせを聞いた。『使者が国々に送られた。「集まって、エドムに攻め入れ。戦いに向けて立ち上がれ。」』」

16 しかし、地は女を助け、その口を開けて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。

ここ一帯の地形が、イスラエルを助けることになります。ダニエル書 11 章 41 節に、こんな預言があります。「彼は麗しい国に攻め入り、多くの者が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。」「麗しい国」はイスラエルのことです。先ずそこを攻め入り、それから、ヨルダン川を越えて向こう側に行くのです。北からアンモン、モアブ、そしてエドムです。けれども、いずれも彼の手から逃げると教えているのです。これが、ここに書いている、女が地形によって助けられるということです。洪水による川は軍隊を表していますが（ダニエル 11:40 参照）、その地形が彼らから守るのです。

今のペトラに行きますと、その入り口がシークと呼ばれるもので、非常に狭い峡谷になっています。場所によっては幅 3 ㍍もありません。それが 1.2 ㌔も続き、うねった通路になっています。ですから、車もそこを通ることはできず、徒歩以外の移動手段は、らくだによるものしかありません。ですから、ここに軍隊が押し寄せようとも戦車も装甲車も入ることができないということです。そこを通り過ぎると、行き着く先がエル・ハズネ、宝物殿と呼ばれる遺跡が出て来て、辺り一帯が岩で囲まれた広い空間が出てくるのです。

このようにして、女は助けられます。残りの民は、その力が打ち砕かれて、真に神に救いを求めるようになります。「レビ 26:40-42 彼らは、自分たちの咎と先祖の咎を、つまり、わたしの信頼を

裏切って、わたしに逆らって歩んだことを告白するが、41 このわたしが彼らに逆らって歩み、彼らを敵の国へ送り込むのである。もしそのとき、彼らの無割礼の心がへりくだるなら、そのとき自分たちの咎の償いをすることになる。42 わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こす。またイサクとのわたしの契約を、さらにはアブラハムとのわたしの契約をも思い起こす。わたしはその地を思い起こす。」そして、ボツラのところに主が来られて、彼らを救出します（イザヤ 63:1-4）。

このように、ボツラで窮地に立たせられているユダヤ人たちに対して、残りの民に対して主が救いに来られます。集まって来る軍隊に対して、イエス様はパランの山、シナイ半島の辺りからボツラに向かってやって来られます。「ハバ 3:3 神はテマンから、聖なる方はパランの山から来られる。セラその威光は天をおおい、その賛美は地に満ちている。」そして、ボツラではそれらの軍隊がことごとく殺され、その戦いは再びエルサレムに戻ってきます。イザヤが預言しました。「63:1 エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」そのようにして戻って来られるイエス様を見て、自分たちの咎のためにこの方は突き刺されたのだと気づき、告白する預言が、イザヤ書 53 章の預言です。

3B 女の子孫への戦い 17－18

17 すると竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保っている者たちと戦おうとして出て行った。

彼らは、イスラエルが生み出した男の子、つまりイエス・キリストを信じた者たちです。信仰によって、アブラハムの子孫とされた者たちです。この人たちが、これまでも見てきたように、患難の時期に入った後でも、イスラエル人の 14 万 4 千人の神のしもべの働きによって救われていった人々です。彼らが、神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保っています。そういった者たちに戦いを挑むということです。

18 そして、竜は海辺の砂の上に立った。

地上にいる竜が、海辺の砂の上に立ちます。これは、海にいる獣を呼び起こすためです。13 章 1 節に、「海から一頭の獣が上って来るのを見た」とあります。

こうしてイスラエルが、隠れ場に隠れて、そこでへりくだり、悔い改めて、メシアを求めることを見ていきました。キリストとイスラエルを巡って、このような壮絶な天の勢力の攻防があります。主は真実な方で、イスラエルだけでなく、キリスト者に対しても戦い、守る御使いを遣わしてくださいます。イスラエルが終わりの日に通る出来事は、今、御霊によって私たちは日々、信仰の鍛錬として与えられるのです。主の御翼の下に隠れ、悪魔の攻撃から守られ、その中でへりくだり、弱さの中で主の恵みを知るのです。